

人文研を考える

ルシオ・クボ

本日はこのような席で発言を許される機会を頂き、大変光栄に思っております。鈴木所長よりこの話があったとき一度は自分よりはるかにその任にふさわしいものがあるかと辞退いたしました。各界の功労ある皆様に意見じみたことをいう機会はまだないという事実気づき、その機会を最大限にいかすことにいたしました。もちろん私のこれから述べることはあくまでも素人の思いつき、暇人のたわごとには過ぎないものかもしれません。当たり前であり、破廉恥であり、底の浅い意見かもしれません。既に皆様が熟慮検討されたことであり納得済みのことかもしれません。ご不興を買う覚悟で申し上げることにいたします。

まず、今回のこの意見発表に当たりまして、次のように考えました。自分がここに呼ばれたのは日本語を読み書きし喋る二世としてです。そこに一つのヒントがあるのではないかと。このような二世は確かに現在の日系社会では余りいないかもしれません。しかし、人文研がその中で私を指名したこと、それはとりもなおさず、他の同じ条件を有し、しかも優秀な人たち、ブラジル社会や世界で活躍している人たちをここに呼ぶことができなかった、もしくはそう考ええなかったということに問題が垣間見えます。つまり現在の人文研の認知度・浸透度が大変低いのではないかとということです。また、現在の人文研の指導部の交流範囲がいかに狭いかということでもあります。

今回の人選では在ブラジル日本人である一世、日本語を喋る二世、そして日系企業人という区別をしてその中で人選を行ってきたこと。この区別は重要な課題を含んでいると思われます。それは人文研と日本語との関係です。いわずもがなですが人文研とは日本語で研究をするところという暗黙の前提を意味しております。この前提を鵜呑みにすることなく深く掘り下げ、その意味するところを再検討する時期がせまっているのではないかとと思われます。

そして、当初、指導部の希望でポル語通訳を立てる予定であったこと。つまり、日本語一辺倒のがんじがらめの状態から脱却しようとする一つの試みがなされたこと、それ自体はすばらしいことです。しかし、残念ながらそれは実現しませんでした。本来こういうシンポジウムというなら、同時通訳を入れるべきではなかったのでしょうか。それは現在の人文研の経済力ではまかなえなかった。この事実も雄弁です。そして同時通訳を必要とするならそれは完全なポル語人間の参加があるということを意味しておりました。このシンポジウムの後別にポル語で同じテーマで開催されると聞いております。ぜひ、この二つのシンポジウムが別々のものではなく、一つの流れとなつて今後の人文研を考える大きな潮流となることを期待します。

さて人文研は何をすべきか。今回のシンポジウムのテーマについて少し考えてみたいと思います。人文研、その目的とはなにか、それを達成するための手段はなにか。それには何が必要か、どのようにして入手し管理するか。そしてなぜその目的を追求すべきか。

人文研はそれ自身、その存在は大きな意味があります。その業績は多きく、誰しもが認めるところであります。たとえば、今回この話をするにあたって友人たちの意見を聞いてみました。二世や三世、日本人、色々な仲間に聞いてみました。中には人文研の存在さえ知らないのもいました。しかし、それでもこういう人文研を知らない人からでてきたイメージはかなりポジティブなものでした。名前を挙げてもしらないと答えたもののなかにはもう少し説明をするとすぐに、あ、良くは知らないがなにかコロニアについて研究するところ、コロニアの記憶装置みたいなのところじゃないか、良いことだとか、非常に興味を示してきました。そして、ほぼ全員、人文研の人文研たる意義を認めないものはおりませんでした。そういう日系社会のことを研究する機関や研究そのものは重要であるということに疑問をさしはさむものはおりませんでした。個人的にはもうそういうものはいらないと考えるものが多いのではと思っていたため、少し意外でした。もちろん、嬉しいことでもあります。ただ、今回のこのミニ調査の相手は非日系のものは含めなかったのがちょっと残念でした。彼らがなんと言うかは興味のあるところですから。

人文研の母体であった土曜会は戦後の混乱期に自然と集まった在サンパウロコロニアの知識人たちの会合であったと聞きます。そしてそこから発展して現在の人文研となりました。それは日本人移民により新時代に対応する己のアイデンティティー再構築の試みであったのではないのでしょうか。そこから出発した様々な研究は今燦然と輝いています。しかし、時は移り、時代は移民から移住者に移り、そして二世三世の世になっています。当然ながら、この研究所の必要性も変わっております。この研究所がブラジルにおける日本人による日本人のための日本人の研究所なら、その役目や目的、そして手段もある方向へ向かうでしょう。しかし、もし、二世・三世、もしくは四世のためのものであるならその方向性もまた違うものではないのでしょうか。余談ですが、日本人としては二世・三世・四世これは日系人として日本人の関連的存在であるとおもわれているかもしれませんが、少なくとも多くの、特に移住者ではない日本人からはよくそういわれます。我々二世はブラジル人であり、日本人ではないといいますと怪訝な顔をして、ワンテンポおいてから、よくわからない。なぜ、と聞かれる始末です。逆に一般ブラジル人には日本人、日系人、二世、三世、という区別は通用しません。ニセイがブラジルで生まれた日本人の子孫を指すと理解してもジャポネースというときには一切一緒になります。そしてニセイもサンセイも顔で判断されジャポネースなのです。だが、ブラジル人であると自己規定をしている二世三世、本人達はどのような位置づけをしているのでしょうか。何を求めているのでしょうか。

今後何をなすか、何をなしえるか。これは誰が主体になるかということでもあります。現在の人文研とは誰のことなのでしょう。誰が誰のためにどのような活動をするか、これが人文研の今後を議題とするときの本来のテーマだと申し上げます。

友人から指摘されたことですが、人文研の強みを挙げるなら次のように言えるでしょう。すなわち、50年近くの蓄積がある、過去に立派な研究者を輩出している、現在進行形で研究活動を持続している、出版やネットで対外発信をしている、一応自前の収入がある、所帯が小さく、経費が少ない。そして、何より借金がない。つまり良い過去があり、悪い過去を引きずっていない。その意味において既に二十一世紀型が用

意されている。これはとりもなおさず、次世代に引き継いでもらうならその負の遺産を残さないですむということです。他の日系団体からみても魅力的なことです。

弱みを挙げるとなれば反対に、収入が少なく大きな事業ができない、所帯が小さく展開能力も小さい、研究費が少ない、経費が使えない。蓄積が生かされていない。過去の研究者と現在のつながりが無い、規模ゆえの人材不足、活動のフィードバックが体系化されにくいもしくはされていない等です。

この人文研の真の目的とは何であるべきなのでしょう。日本人による、日本人のための日本人の研究でしょうか。それとも、日本人・日系人を問わず、できることなら非日系人も巻き込みながら、日本人と日系人の歴史と社会、文化と生産などを研究し、研究者とその周りのもののみではなく、広く日本やブラジル、そして世界の一般社会に向けて発信をする機関になるべきなのでしょう。

先に触れましたが二世や三世の友人たちはこの研究所の重要な役目は過去のみならず現在の日系社会、つまり日本語社会、ポルトガル語社会、その中間すなわちバイリンガルの社会を問わず、現在進行形で発信をする機関を求めています。その中でいくつかの提案がありました。たとえば、もっと子供たちを対象にしてはどうか、日系社会の歴史や理念を子供たちに伝えるために子供たちの訪問時の説明などを用意するとかあってもよいのではないかと。つまり、よく博物館などで学校の生徒たちが先生に引率されてきておりますがそれと同じことです。もちろんこの役目はすぐこの上の資料館が担うものかもしれませんが、しかし、資料館とは違った視点、テーマなども用意できるのではないかと、もしくはそれこそ教師を派遣することも視野に入れたらどうか、という話がありました。加えて言えば、なにも日系人に限ることはなくこの地域の学校に対してそういう働きかけをしても良いのではないのでしょうか。また、も一つの提案はやはり現在の問題です。若い三世ですが人文研が何をしているのか、どのような研究をしたのか知りたくとも、言語的に難しいということ。つまり、ポルトガル語の問題です。訪問したことがあるかと聞いたところ日本人ばかりでなんとなく入りにくい雰囲気だとのこと。どこまでよく知っているのかは判りませんが印象としてそのようなイメージが先行していることがわかります。

いずれにせよ、色々意見がでました、皆様にお伝えするため今回はここに失礼を覚悟で箇条書きという形で提示させていただきます。それに若干の説明と理由付けをさせていただきます。

1. コミュニケーションも交流も言葉から。日本語とポル語の両方向通行の確立するべきではないか。通訳翻訳活動の重要度を再位置づけすべし。養成すべし。
2. 素人との交流を。人文研は研究者のためのみならず、一般社会との交流による時代の要求を知ること。
3. 研究のみならず研究に向けたイベントを開催すべき。日本人社会以外に開かれた研究組織はどうあるべきでしょうか。

4. 研究は本から。図書館機能充実、蔵書目録（目録）、インターネット化。（この作業は現スタッフにより既に相当すすんでいることを申し上げるべきでしょう。）
5. 研究手段拡大はネットから。コンピュータ、インターネット、データベースの充実。若い研究者達の協力でソーシャル・ネットワーク利用なども考えるべき。モバイル、スマートフォン、クラウド、ロボット等、新しいツールがどんどん出現している。いかに今後研究機関としてそういう最先端技術を取り込むことができるか。このテーマも別途もう一步踏み込んでみたいと思います。
6. もっと音楽研究を。沖縄もジャンルとして確立できるのでは。ブラジル音楽と日本の音楽の接点、差など。J-Pop についての情報発信はできないか。
7. ブラジル側の研究と連動。移民と限定しても、アラブ、イタリア、ドイツ等の研究はあるはず、比較研究、関連研究など可能ではないか。また、移民に限らずその（日本）文化や接触・融和の歴史など。
8. プロを養成する、要請できるようになるための組織を充実させる（世界レベルの研究機関にする）、他の研究機関と提携する、交流する。
9. 新しい発想は若い研究者から。若い人に魅力的な環境を構築すべし。（蛇足ながら現在のスタッフには優秀な人たちがいるので彼等の生産性を上げ、将来的にもキャリアを伴う内容で展開できるようすべきではないでしょうか。）

六月に開催された第二回研究セミナーで講師として招かれたジョルジェ・オクバロ氏の指摘も様々な示唆に富んでおります。その延長線上で少し考えてみたいと思います。

また、道草を承知で一言。彼の講演の原稿を人文研のサイトで読むことができます。しかし重大な欠損があります。作者のではなく、サイトの方にです。つまり翻訳が不足していること、ないことです。原稿を仕舞いこまないで公表することを優先して、時間とお金がかかる良質の翻訳をつけることをしないで、できる範囲でやった、ということです。その結果このすばらしい講演も日本語のみしか理解できない場合当日聴衆として参加して通訳による日本語を聞いた人達意外にはとどかないことになりました。

さて、オクバロ氏はタイトルに「日系ジャーナリストから見たコロニア社会」と断った上でさまざまな過去の日本人社会で見られた現象や現在進行中のトレンドなどにつき真剣に、時にはユーモラスに語りました。そこで彼が言及したテーマ、「コロニア」として研究すべきではないかと語ったのは次のようなことでした。

1. 日本文学のポル語翻訳書研究
2. ブラジル人と日本食
3. 日本人日系人のブラジルにおける左翼活動。バルガス独裁抵抗運動、五十年代の労組活動、六十年代の対軍事政権抵抗運動。
4. 異人種間婚姻、その認容と影響

5. 日本の戦後復興や経済成長とブラジルにおける日系人の地位向上の関連性
6. 出稼ぎに関するブラジル人の視点の調査

幾分か上記に列記した他の日系二世三世の意見と重なるのではないのでしょうか。そしてこの著名なジャーナリストは自分を「暫く日系社会から離れていた日系人」と定義しました。離れていてもその中におっても思いは非常に近いのです。このオクバロ氏の提案の重要なことは、まさにコロニアという日本人、ブラジル人近親を含む日系人等が時には緊密に時には距離を置いてブラジル社会でさまざまな生活を営み、そこでこの国の歴史の一ページにそれぞれの足跡を残してきたことを再度検証し、再度未来に向かって再認識しようというところだと思います。

最後になりますが、インターネットという現在では研究活動や啓蒙広報活動に非常に重要なツールであり手段であり媒体である存在について一言付け加えることをお許しください。オクバロ氏の原稿の件をもってもわかる様に人文研のサイトについて再考が必要ではないのでしょうか。つまり、サイトの方向性について考える時期が来ていると思います。今後、人文研はインターネットサイトをどの様に運用するのか、誰をターゲットにするのか、つまり、研究者向けのサイトにするのか（言語はどうするのか）、一般向けにするのか（同）それによって思想も設計も違ってきます。インターネットサイトとはいわば一度に何万人という読者がアクセスできる本棚みたいなものです。そこに数多くの本や雑誌、文字や画像、もしくは映像、総じて情報といいますが詰まっており、図書カードに相当するコンピュータや携帯電話を操作して場所を指定し、そこに行って情報を取り出す。それだけのものです。ですからこの本棚にどのような本を入れるか、それは辞書なのか、論文集なのか、それとも少しやわらかい新書的なものなのか、それ以外のものなのか、そういうことを決めなければなりません。陶然、全て入れるほうがいいかもしれませんが本棚はそれだけ大きくなければいけません、仕様も変わります。つまり、時間とお金がかかります。人手がかかります。また、本棚の構成や見てくれも大事です。どんなにすばらしい情報が入っていようと、使いにくくて埃だらけでは誰も手を出さないでしょう。快適な環境、つまりコンピュータのモニタに現れるときには美しく、モバイルで見るときには手軽にスピーディに閲覧できる環境が必要です。これも同じく人手と時間を必要とします。片手間にできるものではありません。そして、現在の世界の最先端技術であり、常に急速で発展し、転換し、膨張しております。

この辺について聞いてみようと思い、人文研の職員でインターネット担当者の方と少し話をして見ました。そこで彼は理念という言葉を使いました。つまりインターネットを世のため人のためにどのように役立てるかということをしっかり考えそして決定しそれに基づきインターネットを設計しようということです。これは重要なことです。そこで彼に色々なプランを盛り込んだインターネットのプロジェクト、言うならば詳細な稟議書を出してみても提案しました。必ず指導部はそれを検討し、そのプロジェクトを展開するための手段を人を増やすことも視野に入れて、親身になって考えてくれるであろうと思うから、といいました。よろしくお願いします。

長々とあっちへ行ったりこっちに来たりしたこの発表を最後までお聞き頂き、有難うございました。

SP,18/08/11